

マルクス・レーニン主義通信

通卷 34号

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派

ロシア革命六〇周年をむかえて……………	1
完成した「国民春闘」路線……………	4
ハイジャック後の反動政策……………	8
どのようなにして「第三期」を清……………	10
算すべきか―第二次ブント総括……………	(4)

11

ロシア革命六〇周年

をむかえて

(一)

一九一七年一月七日、レーニンに率いられたロシアプロレタリアート人民は、革命的蜂起を貫徹し、二月革命で成立した臨時政府を打倒し、歴史上はじめて、

社会主義國家の樹立を宣言した。

二〇世紀を帝國主義戦争によって幕をあけることになった歴史は、ロシア革命の勝利によって、八戦争と革命の時代Ⅴに突入することになったのである。

このロシア一月革命の勝利は、なによりも、「二〇年が一日に圧縮した」そ

の目におけるレーニンの革命的戦術のなせるものであり、また、それを可能とした、マルクス、エンゲルス、レーニンによつて打ち立てられた科学的社会主义の現実性をあますところなく証明したのである。

レーニンは、二月革命以後、臨時政府に幻想をもち、帝國主義戦争を内乱に転化する戦術をとることができず、「祖国防衛主義」に犯されていた「古参ボルシエビイキ」との非妥協的な闘争を展開した。そして、「二重権力状態」の下において、労働者、農民、兵士代表ソビエト

に結集するロシアプロレタリアート人民の徹底的な武装へとボルシエビイキを領導することによつて、一月革命を準備したのである。

このことは、今日において、「五五年体制」の崩壊となつてあらわれている日本におけるブルジョア専制の危機の時代にあつて、「中道」や「國民的合意」などという口あたりのよい言辞をふりまいてブルジョアジーにへつらい、迎合し、屈伏することが、いかにプロレタリアート人民を欺くものであり、その自覚性、階級性、規律性を眠りこませるものであ

るかというこの歴史的な教訓としてと
れだけ確認してもしすぎることはない。

公明党、民社党など反マルクス・レー
ニン主義を党とする徒輩はもろろんの
こと、協会派マルクス主義でさえ、「共
同戦線党」とは両立しないとする社会党
また、その自由主義的、改良主義へ「換
骨手術」した日本共産党がおしなべてブ
ルジョアジーとの協調を説き、率仕し、
議会制民主主義に埋没しているのみを
とき、これは決定的に重要である。彼ら
は、ハレーニンの道ではなく、カデン
ト、マンシエビキ、エス・エルの道を歩
もうとしているのである。

(二)

さて、ロシア一月革命より六〇年が
たった。この年月のなかで、革命ロシア
は、今日の「ブレジネフ憲法」の制定に
典型的に象徴されるように、社会帝国主
義としての体制的確立をとげるまでに変
質してしまつた。

ヨーロッパ革命のたち遅れ、外国帝国

問題について」として、スターリンは
主要には正しく、誤まりは二義的である
という切要主義に陥いつている。そして、
スターリンとフルシチョフ、ブレジネフ
を切り離し、スターリンによって準備さ
れ、フルシチョフを経て、ブレジネフに
おいて確立されたソ連社会帝国主義への
一月革命で成立したプロレタリア独裁
国家の変質の根底的批判の契機をみずか
ら封殺しているのである。

中国共産党は、また、列強帝国主義と
の闘争を第一におかず、ソ連社会帝国主
義との闘争においても国家間対立を先行
させ、「敵の敵は味方」という論理によ
って、日本帝国主義ブルジョアジーに対
して、「日米安保体制」を容認している
のである。

かくして、このようなことがらには、中
国共産党の偉大な経験と前進にもかかわ
らず、ハレーニンの道Vを真に継承し、
発展しえる地歩にたしめることを妨げ
ているのである。

主義を結託した反革命「白」の内戦、農
村の核へいによる農民と戦時共産主義か
ら農民Pへと転換することによって打開
し、「より発展した階級における社会主
義革命が勝利するまで持ちこたえる」(「
「量」は少なくとも、質のよいものを」)
ために、レーニンは彼の生涯を閉じるに
あたつて必死に闘つた。

だが、激烈な党内闘争の後に、レーニ
ンの後継者となつたスターリンは、レー
ニンの提起した「もちこたえる」戦術で
はなく、党、政府、「国家資本主義」の
なかでうまれてきた特権階級、官僚とゆ着
し、クラーク絶滅—農業集団化による「
社会主義的原始蓄積」による工業化、生
産力上昇を至上課題とする、「一国社会
主義」建設の路線をとつたのである。そ
して、この下に、全世界の革命闘争を従
属させ、またソ連の拡張政策の手段とし
たのである。

革命ロシアが「社会主義的全人民国家」
に成長した、と自賞しうるのは、ただ、
ソ連社会帝国主義者のみなりうることにな
つた。

(三)

一月社会主義革命によって、歴史は、
レーニンに率いられたロシア・プロレタ
リアート人民に、ロシアという文明の不
足した「小農民的な国」におけるプロレ
タリア独裁国家建設の任務を課すること
になつた。

そして、そこにおける未曾有の困難さ
を強い、スターリンの誤まりともあいま
つて歪曲と変質をもたらしたものは、レ
ーニンが熱烈に望み、また第三インター
建設を通じて実践的な指導をはかつたド
イツをはじめとしたヨーロッパ帝国主義
におけるプロレタリア革命のたちおくれ
であつた。この点では、六〇年を経た現
在にあつても情勢のしめすところでは、
いささかの前進もみられない。それどころ
か、巨大な反動の嵐におおわれて見え
ないのである。

他面において、レーニンに社会主義の
終局的な勝利を完全または無条件に確信

ほかならない。
ハスターリンの道Vではなく、ハレー
ニンの道Vを継承しうる者、それは、「
ユーロ・コミュニズム」(日共もしかり)
を標榜し、「社会主義」への移行の多様
性を語たり、プロレタリア独裁、プロレ
タリア国際主義を投げすててしまつて、
自國ブルジョアジーと妥協する日和見主
義者、修正主義者ではありえない。

また、それは、スターリン・コミンテ
ルンの中国革命の指導の誤まりを実践的
に克服し、「農村から都市へ」の拡大を
「持久戦」を駆使してなしとげ、解放軍
を先頭にした中国人民を領導し革命に勝
利し、社会主義建設をプロレタリア独裁
の堅持と社会主義の下における階級闘争
—継続革命によって推進している中国共
産党に与えられるであろうか。

中国共産党は、スターリンの誤まりを
「あるをのほ避けることのできる誤まり
であり、あるものはプロレタリアート独
裁の前例がないという状況のもとで避け
がたい誤まりであつた」(「スターリン

させるにいたつた、資本主義によって闘
争するように訓練され、教育された地球
上の住民の絶大な多数が解放闘争に引き
入れられるという予測が現実のものとな
つていゝ。中国革命、インドシナ諸國の
革命をはじめとした全世界的ひろがり
をみよ。

六〇年を経過した現在、われわれ、日
本労働者階級にとつて、プロレタリア権
力の樹立、またその維持と建設にあつて
も、プロレタリア世界革命の傾点を同時
ものがすことなく、そして、社会主義の
完全または無条件な勝利に理論上、実践
上ゆるぎない確信をいだいていたレーニ
ンにこたえて、日本におけるプロレタリ
ア革命を表現し、全世界人民の國際的団
結をおしすすめ、レーニンの革命的事業
のさん奪の上に築かれていゝ諸々の害悪
を取り除くために奮闘することが求めら
れているのである。この巨大な任務を全
うしうる者こそ、偉大なロシア革命とレ
ーニンの革命的事業を継承しうるだろう。
偉大なロシア—一月革命万歳!

完成した「国民春闘」路線

「現実路線」への転換

総評、中立労連と一部純中立労連で組織する「七八国民春闘共闘会戦」が、一月一四日発足した。

まず領袖総評議長は、来春闘の重点課題として、「来春闘ではあくまでも生活の維持、改善を目標に雇用の安定確保と実質賃金の維持を最低とする要求について労働四団体を中心とする全労働者の合意が得られるより最善をつくす必要がある」と述べた。警察事務局長も、また、「

「討論課題」として、賃金要求に関しては最低限「消費者物価上昇分と定昇分」が必要であるとの基本的考えを提示したのである。

このように、来春闘の特徴は、闘う前から総評系労働運動を資本に従属させる方向へと向けられている。大幅賃上げ、合理化絶対反対という従来の（それが空洞化していたとはいえ）彼らのスローガンは投げ捨てられ、いまや、ブルジョア組合主義者との協調、いしかえれば、資本への屈伏をめざす（？）「現実路線」への転換が宣言されたのである。

深刻化した失業・雇用不安

長期化する不況の中で、失業問題・雇用不安が増大している。

一〇月の倒産件数は、約一六〇〇件（負債総額二二三〇億円）にのぼり、また完全失業者は今年に入って連続九カ月も一〇〇万人台をつづけている（実際は三〇〇万人とも四〇〇万人ともいわれている）。更に、円高倒産、不況業種の人べらし「合理化」、また「企業失業者が八〇一〇〇万人」（萩田日経連会長）

採用ストップと、雇用問題は深刻化を一層強めている。

こうした失業、雇用不安の増大に対して、総評は、「当面する重要課題は失業をなくし、雇用に確保する闘いだ」（「横枝」と、今秋闘を位置づけ、一月四日）は、労働四団体の統一集会をも「成功」させこ。総評の「雇用」では、その対資本、政府要求もさることながら、労働四団体の統一、共闘が強調されているのである。

「五五年体制」の崩壊と、支那階級の危機に対応して、わが社会指導者「総評組合主義者」は「連合の時代」を大々的に打ちだした。同盟・Jのブルジョア組合主義者との共闘を促進し、公明克との協力関係を確立することとひきかえに、以強占・反自民」のスローガンで、「反自民」にゆりかえられた。労働者の階級的立場は、小ブルジョア階級、ブルジョア組合主義者との協調へと、公然と進めしはしめた。

しるも、総評組合主義者は、「反自民」

連合思想とその実践によって「総評の主体的強化」（五五回大会）を計るというのた。考えてもみよ！ J、J Cとの違いがどこにあるのだ。数年来の「国民春闘」路線は、Jに主眼をまきちらしことによって、Jに依存春闘、労働四団主義への接近という総評の「危機」をうみだしてきた。彼らは、「危機」のことはすっかり忘れた。国民主義の反動（「反動」）「広範な国民大衆」（小ブルジョア）と「闘め」をつきはなすことになりはしめまいかと心配して、階級闘争と階級闘争を拒否すること」（「社会主義インターナショナルの現状と任務」レーニン）をますます前面に登場させてきたのである。現実には、「総評の主体的強化」とは裏腹に、総評の崩壊をより一層おしすすめるのである。

強まる資本の攻撃

労働者は、一〇月二三日、七六年の労働生産性調査結果を発表した。

それは、「七三年末の石油ショック以降、低下（七四年）横ばい（七五年）と推移してきた労働生産性が、七六年は対前年比一二・四％と三年ぶりに大幅な上昇を示した。これは、回復過程にある生産量が一〇一五％程増加したにもかかわらず、労働投入量は産業界の慎重な雇用態度を反映してほぼ横ばいだった結果で、企業の「減量経営」の実態の一面を示すものようだ（一〇月二二日朝日）と、不況下で、労働者の解雇、労働時間の延長、労働の強化などの「合理化」を資本がおしすすめたことを示している。

このことは、この不況下で、資本は労働者に労働を強要することにより、また中小企業の倒産、もうからない部門の縮小・整理、工場の閉鎖、企業合併などを通し資本の競争力を強めるとともに、資本の有餘的剰余を高めていることである。労働生産性は、七六年に比して今日では更に上昇していることである。

これらの資本の動きこそ、「資本主義的生産において問題となるのは、直接に

使用価値ではなく、交換価値、特に剰余価値の増大である、ということだけは決して忘れてはならない。これが資本主義的生産の推進的動機である（『剰余価値学説史』）という、資本の本性を証明するものである。

賃上げ問題についても次の桜田日経連会長の発言に、資本の意向は明らかである。「不況に、円高の打撃が加わり、企業への支払い能力はなくなってきた。この状況で日経連が賃上げのガイドラインを示すのはむずかしい」「賃上げは雇用の安定を第一に、労使間でよく協議して決めるべきである」と。

雇用が賃上げか否かではなく、雇用の安定のために賃上げは出さない、と言っているのだ。だが、資本家共が、雇用の安定のためにどのような努力をしたというのだ。いわずもがなである。このような資本家共のベテןに対して総評をはじめ労働四団体と社共は、「政策」闘争に、雇用の展望を与えている。

者に呼びかけはじめたのである。公正な貧乏とは、資本家が労働者に強制するものであり、労働組合は（労働者階級の利益を第一に考える場合）、これらの資本の攻撃から、労働者の生活を防衛するためにこえ組織されている。資本は、この失業の拡大、雇用不安を利用して、労働を強化し、労働時間を延長し、更に低賃金を強制し、資本の支配を強めている。このような時期こそ、資本との闘いが真に要求されるのであるが、楨枝をはじめとする総評組合主義者は、労働者に資本との闘いをよびかけるのではなく、労働者は生活苦をわかちあおうかというのである。

失業の増大、全般的な労働者の生活苦、これらは今日の資本主義社会では避けることのできない一面であり、資本家の側への富の蓄積との対極としてあらわれる。過剰生産とならんで労働人口の過剰、そして産子備軍、失業者群もまたこの社会のなかで不可避に存在する。「剰余労働者人口なるものが蓄積の

「政策」闘争に埋没する総評

総評は、「雇用拡大のために週休二日制の法制化を含む労働時間の短縮や構造不況業種対策など、さまざまな政策手段による解決を迫る」と、雇用問題に関する要求を掲げ「政策」による解決を謳っている。そして、この「政策」闘争が、「どれだけ実績をあげるかが、七八春闘の展望を切り開くことになる」（富塚）と、その意義を強調している。

（註）総評、同盟、そして共産党も、雇用問題に関する政策内容に根本的ならがいはない。共産党の「当面する雇用・失業問題に関する緊急対策」（一〇月二日）は大量解雇等の規制、構造的不況業種等の対策、雇用の確保し拡大する対策、失業者の生活保障と就労事業の拡充の項からなり、これも「日本経済を、国民本位の方向で打開する、もっとも重要な柱の一つ」というもので

または資本制の基礎としての富の発展の必然的産物だとすれば、この過剰人口は逆に、資本的蓄積の積杆となる。資本制的生産様式の一実存条件となる（『資本論』）

だから、たとえ労働時間を短縮したり定年制を延長したり、諸々の雇用安定にむけた諸立法を制定しても、このことによつて完全雇用が可能だと考えることは、むなしなことなのである。今日の資本主義社会の下では、それは幻想であるばかりか、反動的でさえある。

資本の支配にふれずして、そして資本の支配を打倒せずして、雇用の安定を説くことは、現にみてきたように資本の安定を前提とする、資本の支配の防衛という反動的役割におちいる。

労働者は、資本、政府に対して、雇用の安定、失業者の救済を要求して闘うことは、右のような制限があるとしても必要である。このような運動は、「出口のないどうどうめぐり」（『労働組合』エングルス）であり、「このどうどうめぐ

あり、「大企業本位の経済」が雇用・失業問題を招来させたというのだ。

楨枝は、総評大会で「不況で残業時間を増やすことは、それだけ、仲間の職をうばうことにも通ずるものであり、労働者の階級的連帯の立場からの再検討と対応が必要」「賃金が不十分でも、格差拡大を防止すれば、それは公平な貧乏である」と、述べた。

これは、先の桜田発言と同様の「雇用の安定確保」のためには、労働者は賃上げを自爾する必要があるということに行きつく。そして、この楨枝発言は、当然にも彼らが賃金自爾論と批判する資本の手代、宮田鉄鋼労働委員長の、「雇用保障はすべての問題に優先すべきで、労組としても犠牲を甘受する」という主張と寸分ちがわぬ反動的言辭に他ならぬ。

JCへの依存を強め、ブルジョア組合主義と完全にゆ着してきた「国民春闘」は、口先においても賃金自爾を労働

りを打破し、それからの出口を賃金制度の全廃をめざした運動にみいだ（同前）さねばならないということが、いまや重要な労働者の任務として突き出されている。

雇用、失業問題における総評組合主義者の運動は、こうして労働者の書悪とあらわれてきている以上、そのことは一層重要である。

総評組合主義者は、かつて「高度成長期」の中では、「わけまえ」をいくらか得ることによって戦闘的組合主義としての存在をあたえられてきたが、いまでは反合闘争、大幅賃上げ、反独占などのスローガンが消えうせたように、その「戦闘性」も喪失し、日和見主義から排外主義へと成長したのである。

合化労連の最大組合である住友化学労組は、「配置転換や職種の変更に積極的に対処していく」（定期大会）方針をうち出し、富塚は、赤字経営の国鉄の「再建案」として「国鉄の特殊法人化」を提唱し、組合主義者内部からも反発を

うけるといふ、とめどない資本、政府との一体化をうみだしている。

不況下では反台闘争が困難だというのが彼らの考えであり、政策闘争にかわらねばならないというのだ。しかし、人べらしの合理化をほしめあらゆるの合理化が進行している現在、反台闘争は、労働者の生活苦、労働苦を防衛する一つ

ハイジャック後の反動政策

九月二十六日、日本赤軍のダッカ空港での日航ハイジャック事件に対して、一昨年のクマランブル事件に引きつづき「超突定法措置」により人質の解放

「超突定法措置」により人質の解放

九月二十六日、日本赤軍のダッカ空港での日航ハイジャック事件に対して、一昨年のクマランブル事件に引きつづき「超突定法措置」により人質の解放

九月二十六日、日本赤軍のダッカ空港での日航ハイジャック事件に対して、一昨年のクマランブル事件に引きつづき「超突定法措置」により人質の解放

の手段であり、重要な鍵に他ならない。もちろん反台闘争こそ、階級闘争の最大の、唯一の闘争という経済主義者の主張と実践の悪悪が積たわっているとしても、政策闘争にかわるものではない。

とどきかえに五名の政治犯、一級犯釈放「身代金」六百万ドルを余儀なくされた政府は、「二」とこのようなことがあつてはならない」と、日本赤軍の壊滅、あ

（赤色手配）の実施など、国際的なハイジャック対策がすすめられている。日本赤軍にひきつづいての西ドイツのルフトハンザ機ハイジャックへの西ドイツ国境警備隊（GSG9）による強行「解決」にひきさて、その「弱腰ぶり」を非難された日本政府の以上のようなハイジャック対策は、今やそれをふきと

第三に、今国会における「ハイジャック再発防止法」の制定である。これは、①旅券の発給制限を厳しくする旅券法の改正、②「人質による第三者強要罪」を新設し、形罰を現行の「無期または七年以上」から、「無期または一〇年以上」の懲役に加重する航空機強要等処罰法の改正、③銃器、爆発物の機内持ちこみ罪を新設する航空機危険行為等処罰法改正、などの超反動的内容が盛りこまれている。

第三に、以上のような国内的な対策とあわせて、ハイジャック等防止関連三

したのである。労働者は、日和見主義、排外主義の害悪と闘いぬき、真のマルクス・レーニン主義党へ自らを組織することをもち、労働運動と社会主義の結合をかちとるという日毎に高まっていく緊要の任務を全うするため奮闘しなければならない。

わけて、彼らがおしすすめている日本帝國主義権力の反動的強化を遂行しようとしている。第一に、それは、政府の「ハイジャ

い、権力によるお手もりの「公聴会」を強行してきた政府は、刑法「改正」策動に最大限、ハイジャック事件を利用して

日本赤軍は、労働者階級を組織し、その力でブルジョア支配を打倒する任務を放棄したテロリズムの戦術をとってきた。このような彼らの眼まりは、従来のパレステナ革命の支援から、「このような行動（九・二六ハイジャック）の原因となり、その対象となっているのは、ほかならぬ日本帝國主義政権である」（日本赤軍声明）と転換するなかで一層明らか

となつてきているのである。（二六八）

どのようにして「第三期」を清算すべきか 第二次ブント総括 (14)

目次

次

はじめに

第一章 第一期（六一年―六六年）関西ブントの思想形成

第二章

第一部 ゲオルグ・ルカーチ批判

はじめに

△一V ルカーチの世界観

(1) ルカーチと歴史的状况

(2) 弁証法における総体性の契機

(3) 物象化と階級意識

(4) ルカーチの自然弁証法批判

(5) ルカーチの反映論批判

(6) コミンテルンのルカーチ批判と自己批判

④ コミンテルンのルカーチ批判

⑤ ルカーチの自己批判

△二V ルカーチの政治的性格

(1) ルカーチの略歴

① 入党前後

② 「歴史と階級意識」をめぐる時期

③ 表現主義論争期

④ 第二次大戦後

⑤ 空想的社会主義観

(3) 急進的戦術左翼

(4) 倫理的組織観

(5) ルカーチの自己批判

以上前号

本号

第二部 グラムシ批判

第三章 第二期（六六―六九年）関西ブントの実践過程

第四章 プハリリン、ローザ批判

第五章 第三期（六九年以降）関西ブントの思想的、実践的分解

二 ルカーチの政治的性格

(2) 空想的社会主義観

エンゲルスは、「この二つの偉大な発見、すなわち唯物史観と、剰余価値を手段とする資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれがマルクスに負うものである。これらの発見によって、社会主義は科学になった」（『反デューリング論』）と語った。

それに比して、「史的唯物論はプロレタリア革命の理論である」（『レーニン論』）として、経済学を捨象し、歴史科学の構築を試みたルカーチの行きつく先が、非科学的な空想的社会主義であったことは当然なのであった。

イ 又してもエンゲルスに

かみつくるルカーチ

ルカーチは、『歴史と階級意識』の中

で、次のように述べている。

「このようにして、資本主義の経済的な諸力の発展は、社会の運命に関する決定をプロレタリアートの手にゆだねることになる。ここで遂行されるべき変革の後、人類がおこなう移行のことを、エンゲルスは、『必然の国から自由の国への飛躍』とよんでいる。しかし、この飛躍が——飛躍であるにもかかわらず、いままさしく飛躍であればこそ——本質的に一つの過程を現わしているというものは、弁証法的唯物論にとってはきわめて当然のことである。エンゲルスも前述の個所で、変化がこの方向において『ますます増大』すると述べている。ただ疑問となるのは、この過程の出発点はどこにおかれるべきであるのか、ということである。言うまでもなく、もっとも手近なところでは、エンゲルスの言葉にしたがって、自由の国というものを単純に状態とみな

し、それを完成された社会革命の時代に移してしまふことによつて、この問題の現実性をすべて否定するという考え方があろう。こうした確認は、疑いなくエンゲルスの言葉と一致している」

そして、続けてより具体的に三つの疑問をあげている。すなわち、①「はたしてこうした確認によつて問題そのものも実際に論じつくされなことになるかどうか」、②「それをめざして努力していく長い過程……によつて準備されなかつたような状態は、いったい考へうるものだろうか、まして社会的に実現されうるものだろうか」、③「『自由の国』を主みだす使命をもっている過程から、『自由の国』を分りすること、しかも弁証法的な移行を排除しつつ急激に分りすることは、すでに論じたところの究極目的と運動との分りと同じような、空想的な意識構造を示すものではないだろうか」という三点である。言うまでもなく、こうした「疑問」に対するルカーチの回答は、すべて「否」である。

まず、ルカチチが「自由の王国」をどのように捉えているかを見ることにしよう。ルカチチは、先の文章の少し後で、「今日のブルジョア社会における個人的自由は、非違帯的に個人の不自由を踏み台にしているために、すでに腐敗し、しかも人を腐敗させるような、特権たりうるのみである、というこのことは、まさしく、個人的自由の放棄を意味するものにはかならない。このことは、さらに、真実の自由を真実に生かそうと欲意しており、今日、この自由へむかって困難な不確かな、模索的な第一歩を踏みだそうと真摯に考えているような、怒意に對して、意識的に膨脹するということを意味する」と述べている。つまり、我々は、「偽」と「金」の「弁証法」から、「真実の自由」という抽象的な、観念的な「自由」を説教されるだけなのだ。

又ルカチチは、次のようにも言っている。「共產主義の最終目標は、あらゆる行動を律するという規範という点で、倫理の自由が法律の強制的性格にとつてか

われらのような被へる者としてある」(「共產主義的」)における「労働の役割」。しかも、ルカチチによれば、「プロレタリアの権力掌握」とも自由の時代がはじまる(「闘争」ということである。だが、マルクス・レーニン主義者のいう自由とは、そのようなアイマイなものではありえない。エンゲルスは、「自由とは必然性の洞察」(「反テューリング論」)と言い、レーニンはそれをいいかえて、「自然の客観的な合法性を承認し、必然性が弁証法的に自由へ転化する(また認識されてはいないが、しかし認識できる「物自体」が「われわれのための物」に転化され、「物の本質」が「現象」に転化されるのと同様に)を承認することである」(「カール・マルクス」)と述べている。

従って、「自由の王国」にしても、ルカチチのように空想的なものではありえない。「自由の領域は、事実上、窮迫と外的合目的性によつて規定される労働がな

くなる所ではじめて始まる。だからそれは事態の本質上、本質的な物質的生産の諸面の彼岸に横たわる。末開人が自分の欲望を充たすため、自分の生活を維持し、再生産するために自然と戦かわねばならぬように、文明人もかかる戦いをせねばならず、しかもどんな社会形態、ありうべきどんな生産形式のもとでも、かかる戦いをせねばならぬ。人間の発展につれて、欲望が拡大するがゆえに、この自然の必然の領域が拡大する。だが同時に、この欲望を充たす生産諸力も拡大する。この領域内での自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自然との彼らの質料交換により盲目的力によつての如く支配される代りに、この質料交換を合理的に規制し、彼らの共同統制のもとに置くという点——最少の力を充用して、彼等の人間性に最もふさわしく、最も適当な諸条件のもとで、この質料交換を行うという点——にのみありうる。だが、これは依然として常に必然の領域である。必然の領域の彼岸において、

自己目的として行なわれる人間の力の発展が、真の自由の領域が、——といつても、かの必然の領域を基礎としてのみ開花しうる自由の領域が、——はじまる。

労働日の短縮は根本条件である」(「資本論」)。

だとすれば、ルカチチのように、プロレタリアートの権力掌握とともに、自由の王国が実現されると考えることがいかに誤っているかわかるであろう。実に、マルクス、レーニンをこそが、「ゴータ綱領草案」(「国家と革命」などで、その「現象性」を唯物論的科学的に明らかにしたのである。又、ルカチチが非難するエンゲルスは、「広義の経済学」を提唱したのである。

以上のことは、そのまま、ルカチチの「疑問」に答えるものである。共產主義を「理念の勝利」としてしか考へることのできないルカチチにとって、これらのことはまさに馬の耳に念物であったし、「自由の國」が「完成された社会革命後」であれば、それは「現実性の否定」とし

てしか理解できなかつたのである。弁証法を強調するルカチチが、まったく非弁証法的なのである。マルクス、エンゲルス、レーニンの著作を読んだ者であれば、「自由の國」の問題は、明々白々であるし、それは確実に実現され、階級闘争の必然的な結果であることが理解される。それが理解されないのは、「弁証法の大塚」ルカチチのみである。

そして、このことは、ルカチチが「現象性」、現実の運動と「社会革命の時代」を対比させていること、つまり、「理論と実践との統一」を呼ぶルカチチその人が、理論と実践とを分離させていることを明らかにしている。かくして、「究極的な意識構造」という非難は、「プロレタリアートの最初の歴史的な登場そのものが、すでにこの「自由の國」を命じていたことは、疑いをいれない」ということで自らをなぐさめるルカチチにこそ投げられなければならない。

口 政治、経済革命と社会革命の關係

「政治的な革命というものは、——経済的な——現実のなかで少なくとも部分的にはすでに自己貫徹しているような、ある経済的、社会的な状態を法的に承認するだけのことだからである。この場合革命は暴力によつて、「不正」と感じられた古い法秩序のかわりに、「正しい」「正当な」新しい法をすえるのであるが、生活の社会的な環境は、根本的には少しの変化を受けない。……これに反して、社会的な革命は、まさに、こうした環境の衰をわざとしているのである」(「歴史と階級意識」)。

このルカチチの見解は、そのことごとくが誤りであり、混乱の産物である。第一のセンテンスは、ルカチチはこれを革命一般の性格として語っているのだが、プロレタリア革命をとってみれば、その誤りはすぐわかる。労働者階級による生産手段の独占ということが、たとえ「部分的」であれ、政治革命以前に貫徹され

ているであろうか？ 第二のセンチンスは、これが一番問題なのだ、古い法解序が新しいそれにかわって、「生活の社会的な環境は、……少しも変化を受けない」などということが、はたしてありうるであろうか。そんなことがありえないということは、ルカーチを除く、全ての人がわかることである。第三のセンチンス、政治、経済革命と完全に区別された「社会革命」など考えることができない。強いて区別すれば、文化革命であろうが、それが「環境の変革」をすることになれば、「それはウルトラ観念論である。そして、何よりもこの命題は、革命の根本問題たる権力の問題を欠落させている点で、有害きわまりないものといわねばならない。」

ところで、このルカーチの命題は、「こうした人間の自己解放は、経済発展と機械的に平行して同時におこなわれるものではなく、一方では経済発展に先行し、他方では、これに後続するものである。それは純粋にイデオロギーの上での解放

さて、ルカーチは別のところで次のようにもいっている。「もしもプロレタリアートがみずから労働規律をつくりだすばあには、つまり、プロレタリア国家の労働秩序が倫理的な基盤のうえに建てられるばあには、階級分化の廃絶とともに、法律という外的な強制も自動的に終わりをつづける。すなわち国家は死滅する。……だがこれとは逆に、プロレタリアートがもうひとつの別のほうの道を進むばあには、プロレタリアートはひとつの法秩序をつくり出さざるをえず、この法秩序は歴史的発展によって自動的に廃絶させられることはありえない。したがってこの発展は、最終目標のあらわれと実現とを危うくするような方向をたどりがちだろ。なぜなら、プロレタリアがこのようにしてつくり出さざるをえない法秩序は、打倒されねばならないからである……」「社会の発展がどの方向をたどるか、一にプロレタリアートの自己意識にかかっている。かれらの精神的ならびに倫理的な実体は判断力と犠牲を

として現われうるものであって、たいがい、歴史的傾向のなかで、たんに傾向としてであれ、社会秩序の経済的基礎が問題となるような時期に現われてくるものである。このような場合に、理論はこのたんなる傾向をつきつめて考察し、その解釈を改めてあるべき現実とみなし、それを『真の』現実として、『虚偽の』既成の現実に対置する」(又々、ゾレン(当為)とザイン(存在)の「弁証法」だ！)というところが、社会革命によりあてはまるというこの理由として述べられたものである。

だが、意識の変革を問題にし、それが社会革命によりあてはまるといったところで、それは当然すぎることである。実はここに、ルカーチが引き出したい問題が横たわっているのである。

すなわちルカーチは、先の命題の少し後で、御ていねいにもマルクスのルーゲの手紙を引用したあとで、「このような意識の変革は、革命的な過程そのものである」と述べている。ルカーチは意識革

命を強調したために先の命題をものにしたのだ。

政治、経済革命を軽視し、意識革命が「環境を変革する」、これぞ、主観主義者ルカーチの真骨頂ではないか！

ルカーチをしてこのような結論に導かせたものは一体何であろうか？ ルカーチは、先の命題の直後に、「このような変革はいずれも平凡な人間の本能とは反対の方向にむかって強く突き進んでいくので、かれはこのような変革のなかに生活一般の破局的脅威を見出し、それを洪水か地震のような自然力とみなすのである。こうした変革過程の本質を把握しえないために、自己を防御しようとするか、この絶望的な努力は、かれの日常生活のあり方をおびやかす直接的な現象形態に対する抗争にむけられている」と述べている。

つまりルカーチは、革命の困難さの前で動揺し、労働者階級の能力に確信を持てずに、不安にかられ、その裏返しとして、先の命題を作り出したのである。

おしまぬ人にかかっている」(『共産主義的生産における倫理の役割』)。

天晴れ、ルカーチ、偉大な倫理主義者という称号が贈られるであろう。

ルカーチはここでも労働者階級の能力を信用できず、その倫理、良心に訴えるのである。「史的唯物論はプロレタリア革命の理論である」と語ったルカーチは、史的唯物論を全く理解しなかった。法律は、社会の土台に規定されるというのは史的唯物論の基本的な命題である。だがルカーチによれば、自己意識によって法律が規定され、法律によって国家が規定されるのであり、自己意識が社会の発展させるといっているのである。かくして、労働者階級は、ルカーチの歴史哲学を習得すれば、革命に勝利するという結論が出るのである。

ハ 「真正」社会主義者ルカーチ

ルカーチの『レーニン論』は、先にも述べたように「史的唯物論はプロレタリア

ア革命の理論である」という命題で始まる。そのことの結果がどのようなものになるかは、既にみてきたことである。ここでは、それらをまとめることにする。

ルカーチは「革命の現実性、これがレーニンの基本的思想であり、そして同時に彼をマルクスと決定的に結びつけている点なのである。なぜなら、プロレタリアの解放闘争の概念的表現としての史的唯物論が理論的にも把握され定式化されるのは、その実践的現実性がすでに歴史の日程にのせられた、歴史的瞬間においてだけだからである。」「史的唯物論は……プロレタリア革命の世界的現実性を前提とする」(同前)と述べている。

理論は、現実の反映であるという限りでは、ルカーチのいっていることは正しいようにみえる。だがルカーチは、「歴史的瞬間」を理論化するのには「天才」であるとして、具体的なマルクス、レーニンの作業を検討することはしないのである。マルクスとレーニンの関係にして「革命の現実性」ということで片づ

けられてしまっている。

ルカーチの「現実性」とは、先にも見たように概念的なものであるが、それは、当時のヨーロッパ資本主義の混濁、危機に明らかに規定されている。しかもルカーチは、「人類救済」を口にしてはいるように、それを「人類の危機」として捉えているのである。

このような危機感からは小ブル的主義主義的な理論が生み出されるのはしばしばあることである。ルカーチはそれに対する処方センを作り出した。ルカーチの概念的な哲学体系は、その概念的な資本主義の把握にも規定されている。資本主義の矛盾を部分的かつ概念的に捉えたルカーチは、当然にも、概念的な解決法を考へ出した。そして、まさに現実的な運動に、さまざまなつくりごとでつき問をうめることでもって、それを結びつけたのである。かくて、理論と実践は「統一」されたのである。

その結果は、マルクスが批判したドイツの「真正」社会主義と同じような理論

である。ドイツの社会主義者が、フランスの思想を自己の哲学の良心と調和させたように、ルカーチは自己の康德、ヘーゲル、ウエーバーなどの思想と、マルクス・レーニン主義と調和させた。そして、ルカーチにとって、プロレタリアートの目標は、「理念の現実化」の一音が示すように、ソレンでいさなく、プロレタリアートの要求は、「実践理性」一般の要求を意味したのであった。「正統派マルクス主義」をめざしたルカーチがたどりついたところは、まさに、「真正」社会主義であったのだ。

このような形で、希代の「天才」ルカーチは「歴史的瞬间」を理論化した。だが、それが非科学的、非マルクス主義的なものだったことは当然である。

(九ページより)

日本の労働者階級と結びつき、帝国主義ブルジョアジーを打倒する闘いは、彼らのようにテロリズムによっては勝利することはできない。日本階級闘争や覚悟

闘の事業から召還し、テロリズムに革命的闘争によって日本帝国主義への闘争をよびかけることは、プロレタリアートの革命的任務をあいまいにし、組織的團結に乱すことにほかならないだろう。

だが、権力やブルジョア・マスコミに唱和して日本共産党などのようにクダラぬ政策々を云々したりして、日本赤軍への組織的襲撃に手をかすことはまったく誤りとなっているのである。彼らは権力の走らなうて、警察、検察、司法の反動化を率先して行ない、ブルジョアの法秩序の維持にブルジョアジーと共通の命運をかけているのである。

福田政雄は、「五五年体制」崩壊を決定的にした昨総選挙後登壇して以才、三里塚鉄塔撤去、東山氏虐殺、狭山上告発知など一連の反動攻撃を今因の反動的措置は、赤軍の壊滅を狙った今因の反動的措置は、実は、ブルジョア独裁の暴力的転覆をめざす、すべての革命的党派、人民の闘いを弾圧し、解体しようとするブルジョアジーの意図をロコツにしている。

これをうち解くために、労働者階級は社会主義と労働運動を結合させ、骨の髄まで武装したブルジョア専制支配との闘いをよこす、いっそう強めなければならぬ。

マルクス・レーニン主義通信 // 月号

発行日・ 1977, 11, 10

連絡先・横浜市港南郵便局

私書箱 / 6号

郵便振替・横浜 3719

定 価・ 100円